

長野県植物覚書

今井建樹

Imai, Kenju : Notes on Plants in Ngano Prefecture

1. シロバナムラサキミミカキグサ *Utricularia yakusimensis* f. *albida* Hara

1992年8月25日、大町市居谷里湿原に数箇所ムラサキミミカキグサの白花品が見られた。県下にその記録があるかどうか詳しいことは分からないが、初採ではなかろうか。ムラサキミミカキグサに混生し、母種よりは小型であった。

2. ムラサキミミカキグサの長葉型

1993年9月28日、大町市居谷里湿原で葉の異常に長いものを採集した。本種の葉はへら形で長さ3~6 mmの地上葉をつけるとあるが、今回採集したものは50mm前後の長大のものであった。葉形はへら形で特にかわってはいなかった。清水教授に調べてもらったところ、標本の中にこれ程大きなものはなかったが、葉長には変異があり、環境によって長大なものが出ることもあるだろうとのことで、連続的な変異と考えてよかろうという結論であった。標本は植研の標本庫に入れる予定である。

3. ノダケモドキ *Angelica hakonensis* var. *nikoensis* (Yabe) Hara

1993年10月2日、池田登志男氏の案内で佐久市荒船山に登った。この登山道で採集して、清水教授に同定していただいて、良かろうとのこと。県下では初の記録となると思う。

4. シナノノダケ *Angelica sinanomotana* Kitagawa

茅野市竜神池の池畔の多湿地の林下に群生していた。清水教授に同定していただいた。ことの発端はシナノノダケ再発見の新聞記事からであった。本種は東京科学博物館の標本室のノダケモドキの中に入っていた八ヶ岳産の1点の標本から、北川政夫氏が新種として1968年に発表し、以来そのままとなつてどの

本にものせられないでいた。ところが1988年9月に山崎富美子氏が竜神池で採集した標本に基づいて山崎敬氏によってこれがシナノノダケであると再発見の発表となったのである。本種はノダケモドキやシラネセンキュウに大変よく似ていて、今まで見過ごしていたのである。本種が日本のフローラとして日の目を見たこととなった。関係資料など清水教授に大変お世話になりました。記して深謝致します。

5. ニシキナギナタコウジュ *Elsholtzia splendens* Nakai ex Maekawa

1992年10月下旬に花里弘氏が川上村で採集され、フトボナギナタコウジュではないかと考えられていた。そこで翌年10月5日に池田氏と三者で同地に調査に行つて採集した。清水教授の同定の結果、中国北部および朝鮮産の本種と判明した。本種は花冠が濃紅紫色で長さ7~10mmと長く、ナギナタコウジュ・フトボナギナタコウジュの約2倍長である。従つて色や大きさから名のように美麗である。日本初採のもので、満鮮要素が一種加わることとなった。

6. イワヨモギ *Artemisia iwayomogi* Kitam.

1992年9月に花里氏が川上村で採集した。ニシキナギナタコウジュと同所に生えていて、翌年10月5日にニシキナギナタコウジュの調査の際開花中のものを確認した。本種は北海道・南千島等に分布が知られているもので、本州では四賀村からの報告があるだけで、本州第二の産地である。

7. アズミノヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* var. *azuminoense* Kadono et Hamashima

1993年8月2日、豊科町南穂高の水田で確認。

本種は1984年8月に穂高町の水田で採集されヘラオモダカの変種として発表され、和名は産地にちなんでつけられたものである。花茎が葉より上に出ず、花が密集した花序となることが特徴である。県下にどのような分布をしているのか調査する必要がある。

8. エゾヤナギモ *Potamogeton compressus* L.

1993年7月11日植物研究会の野外観察会で諏訪湖で採集した。今までヤナギモの記録は県下にあるが本種は初採である。ヤナギモに似ているが茎が著しく扁平で翼のあるもの。角野康郎氏に県下の標本も同定していただいたが、諏訪湖以外は現在のところ出ていない。

9. コウキクサ *Lemna minor* L.

1993年7月11日、角野氏の指導で諏訪湖で観察したとき確認した。アオウキクサに似るが葉状体がアオウキクサは倒卵形～楕円形、長さ3～6mmで薄く、表面は淡緑色から緑色、基部は左右不相称で先は円く、根冠は鋭頭。これに対してコウキクサは葉状体が左右相称で円形～広卵形、長さ1.5～4.5mm、幅1～3mm、やや厚みがあり、表面は光沢がある。根冠は鈍頭である。このように違い、本種の方が明らかに小形である。軽井沢町中軽井沢に冬季も結水しない池があり、冬でも浮草があるという話を聞き、池田氏に案内して貰い採集して角野氏に同定願ったところ、これも同種とされた。このように常緑の状態の場合もあるとのこと。県下にはどこにもあると思うが、今のところ本種の報告はないと思う。今後の調査が必要である。

10. イヌタヌキモ *Utricularia tenuicaulis* Miki

横内斉「信濃植物誌」によれば県下では富士見町だけに記録がある。諏訪の自然誌植物編では諏訪湖周辺の平坦地と富士見町・茅野市・原村地域に分布の記録がある。今回採集した各地の標本の同定を角野氏にお願いしたところ、以下の地域は総て本種であった。

原村八ヶ岳農場の湿地・白馬村親海湿原・大町居谷里湿原・佐久市吉幅池・佐久町影新

田の水田。

なおタヌキモは横内リストでは県下各地となっているが、タヌキモが果たして分布しているかどうか今後の調査が必要である。

11. シソクサ *Limnophila aromatica* (Lam.) Merrill

1993年10月12日山口村六区の休耕田で採集した。杉本「長野県植物総目録」によれば、上下伊那に分布するとなっている。下伊那の植物（中巻）に記録はなく、上伊那誌には南部に分布の記録がある。木曾では初採と思う。

12. マンシュウクロカワスゲ *Carex peiktusanii* Komar.

1956年豊口山の石灰岩地で報告されたが、レッドデータブック1988年によれば、絶滅？となっている。1991年7月6日八ヶ岳の赤岳鉱泉の下で採集した。満鮮要素で日本の第二の産地となる。清水教授に同定していただいた。

13. ヘラハタザオ *Arabis ligulifolia* Nakai

1990年5月31日釜無山地の石灰岩地で採集し、清水教授に同定して戴いた。満鮮要素で日本のフローラに1種が加わるようになった。本種については1951年上伊那の戸台の標本に基づいて大井次三郎博士によって新種トダイハタザオと発表されたが、その後博士自身がエゾハタザオと同種であるとされていたいきさつがある。以後トダイハタザオはエゾハタザオとして扱われていたようである。詳細は省くが、明らかにエゾハタザオとは異なり、朝鮮に分布するヘラハタザオと同種となった。そこで別名はトダイハタザオとなる。なお本種は十数年前に既に採集されていて疑問種として諏訪教育会の標本庫のエゾハタザオの中に入れられていた。

14. ホンバウキミクリ *Sparganium angustifolium* Michaux

八ヶ岳白駒の池産のミクリの標本を角野氏に同定して戴いたところ本種となった。タマミクリと誤認していた。県下では初採となる。

信大の標本庫の中に茅野市蓼科産の標本が1点含まれていた。

15. シロバナショウキラン *Yoania japonica* f. nov.

1989年7月2日長門町鷹山にて確認。本種は正式には記載されていないと思う。いずれにしる県下では初採のものと思う。その後3年ほど現地を訪れているが、ショウキランに混生して数株見られた。ショウキランの生態はよくわからないが、前年と同一の場所にはなく、どうも一度花をつけると少なくとも次の年には同一の場所には何も見られない。地下がどうなっているかは不明である。

16. コモチミヤマイラクサ *Laportea macrostachya* f. *bulbifera* Kitam.

ミヤマイラクサは各地に見られるが、通常珠芽はない。葉の付け根に珠芽のあるものがこれである。保育社の原色図鑑によれば新潟県の能生にあるとなっている。1991年9月5日に小谷村の大綱で確認し、1993年9月28日白馬村佐野坂、親海周辺の林下に多数認められた。多雪地帯に分布するものと思われるが、県下の分布を調べる必要がある。

17. コバノヒルムシロ *Potamogeton cristatus* Regel et Maacr.

横内斉「信濃植物誌」によると、大部分の郡からの報告があるようになっているが、標

本庫の標本を角野氏に同定していただいた結果、全部ホソバミズヒキモであった。ホソバミズヒキモを誤認していたと思われる。同氏によると長野県には分布しないのではなかろうかと言うことであった。県下にはたして分布するかどうか調査が必要である。

18. イヌミゾハコベ *Elatine triandra* Schkuhr.

各地からミゾハコベの報告はあるが、本種の報告はないようである。果実が無梗のもので、ミゾハコベは短梗がある。1993年に調査した結果両種は水田に混生している。南北佐久・諏訪・東筑・南安1・北安では分布を確認することができた。

19. セイヨウアブラナ *Brassica napus* L.

一般にアブラナと呼ばれて栽培されたものが野生化したと言われている。ニホンアブラナに比して、葉や茎がうっすらと白粉を塗ったように白っぽいのが特徴のようである。諏訪湖畔からそれに流入する河川敷に群生が見られるようになった。

20. マツバウンラン *Linaria canadensis* (L.) Dum.

1993年7月6日諏訪湖畔にて確認。北米原産の帰化植物。近畿地方を中心に瀬戸内にかけて広く帰化するとある。この地方に見られるのは次第に北に分布を広めているのかと思う。

〔新刊紹介〕伊那谷自然教育研究会著「中央アルプスと伊那谷の自然」A5判、229頁、1993年9月発刊、2600円。信濃毎日新聞社。

この著書は中央アルプスと伊那谷の自然を紹介するものであるが、伊那谷を長年見つめてきた人たちの記録でもある。木曾駒ヶ岳(2,956m)を主峰として南北に連なる中央アルプス、それに沿って流れる天竜川、あばれ川としても知られるこの川は複雑な伊那谷の地形を形づくり、他方では動植物をはじめとす

る豊かな自然を育んできた。そのような伊那谷や中央アルプスの生成の過程を解説するとともに、そこに見られる様々な動物や植物の姿、季節的变化、分布、生活史などについて紹介している。著者はいずれも地元で活躍してきた方々であるだけに、動植物の季節的变化がよく捉えられている。伊那谷の生い立ちや自然を知るうえで良いテキストになるであろう。(T.S.)